

明珍本舗（姫路市）見学記

ATAC では年に数回、地元の企業を訪問し、ものづくりの勉強に役立てています。2015年8月21日にATACメンバー4名で兵庫県姫路市の明珍本舗を訪問しました。今回の見学はこれまで訪問してきた近代的な設備によるものづくりとは異なる、日本古来の伝統の技を長年にわたり受け継いできた「匠」の世界です。

訪問した明珍本舗は平安時代から甲冑師として続き、江戸時代中期からは姫路藩主・酒井家に仕え、現在52代目の明珍宗理さんを当主に、家内工業で火箸作りを行っています。明治維新以降は甲冑の需要が無くなったため、火箸作りを専業に伝統の技を現在まで受け継いできています。茶事用の火箸は昔、千利休からの求めに応じて作ったという故事にならってはじめたところ、茶人をはじめ一般家庭でも広く愛用されているそうです。

火箸は鉄素材が持つ独特の打音が美しく、近年では火箸を用いた火箸風鈴が人気を集めています。元々明珍家では日本古来の鉄の製法であ

る踏鞴（たたら）による和鉄を用いて火箸を制作していましたが、現代では和鉄は貴重な材料になっているため、年間数組しか作られていません。通常は現代製鉄の条鋼を使用しているそうです。しかし製造法は伝統ある方法で、一本一本手仕上げで加熱しては鋸で鍛錬していく技法が守られていて、古来から伝わる技そのものでした。「明珍火箸」風鈴の音色がよいのはこうした伝統の技が引き継がれてきたからといえるようです。最近では鉄製の火箸に加え、新素材としてチタンを用いた火箸風鈴、おりん等、将来53代目予定の明珍敬三さんは新製品開発にも意欲的に取り組んでおられ、その姿に感銘を受けました。（三浦）

